

## 「黒曜石の探究(4)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

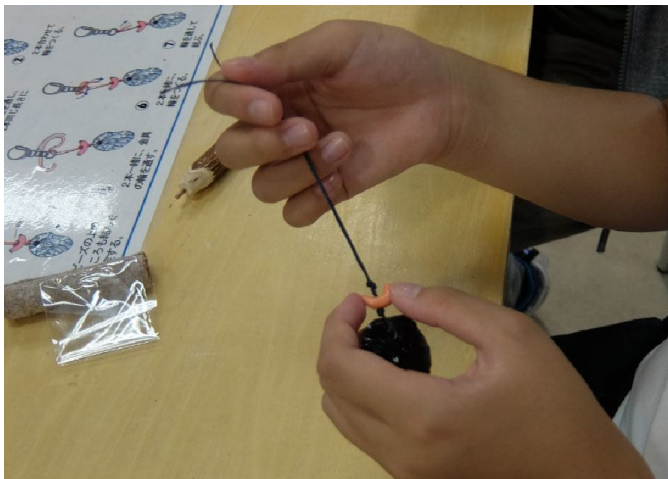
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

「黒曜石体験ミュージアム」は、長野県有数の黒曜石産地である和田峠や星糞峠(ほしくそとうげ)にほど近い。しかし、売店で売っている黒曜石の原石や体験プログラムで使う黒曜石は、北海道白滝産のものである。長野県産のものは有色鉱物が少なく、透明度の高いものが多い。北海道産のものは、真っ黒で透明感はないが、美しく黒光りをするのが特徴だ。



体験プログラムでは、最初に石の周縁部を砕くようにして形を作る。ペンダントを作るグループでは、仕上げとして、石で周縁部を削って、形を整える作業がある。これは、古代人もやった方法で、実際に削るのに使った石(砂岩が多い)が出土している。黒曜石は「火山ガラス」つまり天然のガラスなので、硬度は人工的なガラスと同じ「5」前後である。砂岩は岩石なので、硬度は一定ではないが、どちらも削られているので、同じぐらいの硬度を持っているのだろう。



ペンダントのグループは、最後首にかける紐をつける作業が残っている。この作業にもこだわりがあり、結び方や留め具のつけ方が難しい。留め具も、勾玉の形をしていて、ちょっと古代おしゃれの雰囲気だ。



矢じり作りのグループは、なかなか苦心していた。もともとそれらしい形状の石を準備してくれているのだが、中央がへこんだ形状なので、削り出すのに根気がいる。しかし、どの子も見事に矢じりの形に整っていて、感心した。



矢じりは最後にこのようなオブジェになる。もちろん、実際に射ることはできないが、雰囲気は満点だ。この博物館の優れた点の一つは、売店で売っているものも、体験プログラムの材料も、外注などせず、すべて職員が自前で準備している点である。職員が準備し、職員が説明し、職員が指導して作る・・・雨対ではなく、晴れていても利用する価値があると思ったのは、こうした教育普及に対する真摯な姿勢である。

### 【林間学校ノートから】

「私は黒曜石は、やすりとかだけでずって、形を作るんだと思っていました。でも実は、はしのほうをつぶすみたいに少しずつく方法でした。時間がかかったけど、いい体験ができました」